

[タイトル]

記録のパフォーマティヴ・パワー [1]

The Performative Power of Records

[著者]



エリック・ケテラル | Eric Ketelaar

訳: 森本祥子 | Sachiko Morimoto (translation)

[キーワード]

| パフォーマティビティ | 意味構築の心理学 | カルティベーション | アーカイブズ 2.0 |
performativity / psychology of meaning construction / cultivation / Archives 2.0

[要旨]

継続的な活性化を通じたアーカイブズのカルティベーションによって、人々やコミュニティは自らのアイデンティティを形成していく。この活性化においては、アーカイブズの意味は認知、感情、意欲の諸モードにおいて構築・再構築される。アーカイブズ文書は情報対象にとどまるものではなく、コミュニケーション・プロセスの構成要素なのである。そのプロセスでは、ドキュメントはパフォーマティヴ・パワーを持ち、それによって何事かを成し遂げ、パフォーマンスの前後でものごとの状態を変化させる。このように、アーカイブズとは、レコード作成者の声だけが吹き込まれた固定的な人工物ではなく、時空間を超えて無限の関与者を巻き込むダイナミックなプロセスなのである。これが、アーカイブズは決して閉じられることがなく、将来に向けて開かれたものであるという所以である。デジタル・アーカイブズは常に生成されつつある状態、すなわち、マイグレーションやデータ復元といった技術、あるいはソーシャル・メディアのアプリケーションによって、常に作成・再現されている状態だと言える。

By cultivating archives through successive activations people and communities define identities. In these activations the meanings of archives are constructed and reconstructed in cognitive, affective and conative modes. Archival documents are not exclusively information objects, but components of a communication process. In that process documents can have performative power, they can accomplish something, make a difference in status before and after. Archives are thus not a static artefact imbued with the record creator's voice only, but a dynamic process involving an infinite number of stakeholders in time-space. That is why archives are never closed, but open into the future. Digital archives will always be in a state of becoming, being created and recreated by technologies of migration and reconstruction, and by the use of social media applications.

2009年8月24日、オランダ国立公文書館では、日蘭通商400年を記念する展示が、コンスタンティン王子・ローレンティン妃御夫妻に伴われた秋篠宮殿下・紀子妃殿下御夫妻によって開かれました。それは、1609年8月24日に徳川家康がオランダの通商を認可した朱印状を発給してからちょうど400年目にあたります。朱印状には「オランダ船は、いつ、日本のどの浦に上陸しようとも、それを妨げられることはない」と記されています[2][図1]。この文書には「ちやくす くるうんへいけ」という名前が記されていますが、これはこの文書が発給される1ヶ月前に日本に着いたオランダ船船長の名、ジャック・フルヌウェーフを日本語で書こうとしたものです。朱印状は、日本の漆器や陶磁器の荷とともにアムステルダムに送られました。この貴重な文書はオランダ東インド会社の本社でアーカイブズとして保存されたのですが、その建物は現在、私の勤務先の大学の社会科学部として使われています。

家康の死後、息子の秀忠は1617年に通商を改めて許可し、新たな朱印状を発給しました。1641年、第3代将軍徳川家光は、オランダ人の居留地を平戸から長崎の出島に強制的に移しましたが、そこは数年前にポルトガル人商人の居留地として築かれたところでした。オランダ東インド会社の経営陣は、1630年代後半に日本との関係がぎくしゃくするようになると、貿易が制限されるかもしれないということを警戒し、1609年の朱印状をバタヴィアに送り返し、それを日本に送って、オランダ人は日本での自由貿易を認可されているということの疑いのない証拠として老中に示すように指示を出しました。朱印状を送り返したというこの逸話は、デレク・マサレラ氏(中央大学)とイズミ・K・タイトラー氏(オックスフォード大学ボドリアン日本研究図書館)が発掘したものです。私はこれを「日本の朱印状」[3]という彼らの1990年

1——2009年10月24日、学習院大学での講演。講演の一部は修正のうえ、以下の筆者著作に取り込んだ：Eric Ketelaar, 'Cultivating archives: meanings and identities', *Archival Science*, vol.12 no.1, pp.19-33.:DOI 10.1007/s10502-011-9142-5.

2 —— オランダ国立公文書館所蔵、Factorij Hirado en Deshima (1.04.21) nr. 1A。『大日本史料』12編6冊453頁に複製あり。オランダ側は4通の朱印状を受領しているが、そのうち残存するのは1通のみである。

3 —— Derek Massarella and Izumi K. Tytler, 'The Japonian charters: the English and Dutch Shuinjō', *Monumenta Nipponica*, 45 (2), pp. 189-205.

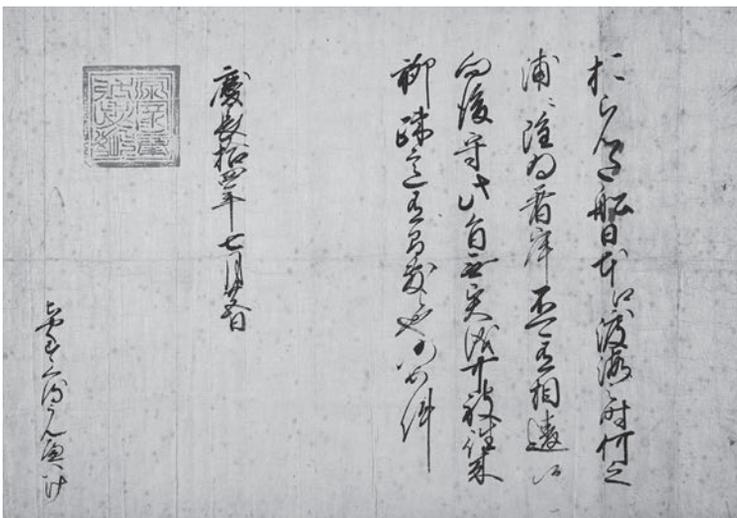


図1 —— 1609年朱印状。オランダ国立公文書館(ハーグ)所蔵、平戸および出島商館(1.04.21), nr. 1A

の論文から引用しました。

朱印状は丁寧に包まれて献上用の箱に納められ、1641年11月6日に予定通り長崎に到着しました。そしてオランダ通詞の一人が、まるでそこに書かれていることが聖なる言葉であるかのように大切に扱い、長崎代官に届けました(この頃までには、家康の神格化が確立していたのです)。代官はその文書を検分した後、オランダがこれを日本に持ち帰ってきたことを賞賛しながら、たいそう儀式ばって、オランダ商館長にそれを返しました。商館長ヤン・ファン・エルセラックは、バタヴィアからの指示に従い、12月の江戸参府の折に、この今回届いた1609年の朱印状を1617年発給のものとともに持参しました。オランダ側は、崇拜されている家康の朱印が捺されている文書は、そこに書かれていることがまるで家康が墓所の中から発した言葉であるかのように、長崎でと同様に崇拜と服従を引き出すことを期待しました。そうすれば、オランダ側が権利として与えられていると信じていた(それは間違った理解なのですが)自由貿易を現実に復活させることは無理だとしても、少なくとも、老中達は、現在出島で課されている厳しい制約を役人達にゆるめさせたり、平戸からの強制移住に伴う損失を何らかの形で賠償せざるを得ないだろうと考えたのでした。事実、老中達は、オランダ人がこの神聖な文書を保存するために手をかけてきたことには深く感じ入り、複製を作成するよう指示を出し、オランダの話を通訳に聞きはしましたが、その要求には耳を貸しませんでした。政策は情緒に左右されることはなかったのです。オランダ側は、プライドをぐっと抑さえ、平戸の商館の立ち退きにかかった費用を書き上げ、出島に閉じ込められることを受け入れるしかありませんでした。当時、日本との貿易はまだ利益があったのです。

1609年と1617年の朱印状は、楠で作られた特製の筆筒に入れられて出島で保管されました。危機に見舞われた時には、この筆筒の救出が最優先でした[4]。それらは、1860年に他の出島の文書とともにオランダ国立公文書館に寄託されるまで、ずっと出島にありました。現在、この朱印状は、日本との通商400周年を記念したハーグの国立公文書館での展示の目玉となっています。1648年のウェストファリア条約——ネーデルラント連邦共和国の出生証明書——のために特別に作られた展示ケースには、いま、徳川家康の1609年の朱印状が入れています。その展示ケースは神殿のような形をしており、1641年に代官や將軍徳川家光がそう認めたように、朱印状を聖なる言葉を記したものとして復権させるのに一役買っています。当時と現在、異なる状況と異なるコンテキストで、朱印状は公開され、朱印状はパフォーマンスのなかである役割を演じています。朱印状はパフォーマンスしているのです。

公開された記録、パフォーマンスする記録について、別の事例を紹介しましょう。オーストラリア・メルボルン市のヴィクトリア州議会議事堂の近くに、「^{Great Petition}大請願」と題する、メルボルン在住の芸術家ペネロープ・リーとスーザン・ヒューイットによるモニュメントがあります[訳注1]。このモニュメントは女性投票権成立100周年を記

訳注1—— ヴィクトリア州政府の下記サイトに写真および解説あり。http://www.arts.vic.gov.au/About_Us/Major_Projects_and_Initiatives/Great_Petition_Centenary_of_Womens_Suffrage_Artwork

念して、2008年12月3日にヴィクトリア州知事によって除幕されました。それは記録をかたどったモニュメントなのですが、そのようなモチーフを取り上げたものとしては、唯一でないとしても、数少ないモニュメントです[5]。その記録に刻まれているのは1891年の女性参政権の請願で、これは260メートルもある巨大な巻物で、文書をほどこだけでも修復担当者が2人がかりで10時間かかりました[図2]。この巻物は、ヴィクトリア州全体での「戸口訪問」キャンペーンによって約3万件の署名を集めたもので、議会への請願としての体裁が整えられています。それは「祈願」です。署名や住所が書かれた紙の末尾には、必ず「そして請願者は祈願し続けます」という請願を閉じる文言が物理的に加えられています。この請願を議会に運ぶため、複数の人が付き添いました。おそらくこの巻物は、少なくとも部分的には、印象的にさっと広げられたことでしょう。

私は、徳川幕府初代将軍が発給した1609年の朱印状から話を始めました。これは、文書に書かれているように、「オランダ船は、いつ、日本のどの浦に上陸しようとも、それを妨げられることはない」という徳川家康の明白な意志を伝えるために作成され、捺印されています。文書は、将軍が口にした言葉に代わって、通商の許可を伝えました。言語行為論[6]——オースティンとサールの記号論——が明らかにしているように、言語は何かを描写したり説明したりするだけでなく、実行したり、適用したり、パフォーマンスするものなのです。私たちは言葉によってものごとを実行します。例えば、「会議を始めます」、「あなたに洗礼を授けます」、或いは「ここにあなたたちを夫婦と認めます」といった具合に。これらは、パフォーマンスする発話の例です。これは話し言葉に限らず、書き言葉でも起こります。1609年の朱印状は将軍の意志を表しました。1891年の大請願は、議会に宛てて「以下に

5 —— 以下のサイトから情報入手可能：ヴィクトリア州議会「女性参政権のための請願」(<http://www.parliament.vic.gov.au/about/the-history-of-parliament/womens-suffrage-petition>)、および、ヴィクトリア州公文書館「1891年女性参政権のための請願」(http://wiki.prov.vic.gov.au/index.php/1891_Women%27s_Suffrage_Petition)。(訳者補注：ウェブサイトのアクセス確認日は2011年12月13日。(以下同))

6 —— Pekka Henttonen, 'Records, rules and speech acts: archival principles and preservation of speech acts', *Acta universitatis tamperensis*: 1246, Tampere University Press, Tampere, 2007.

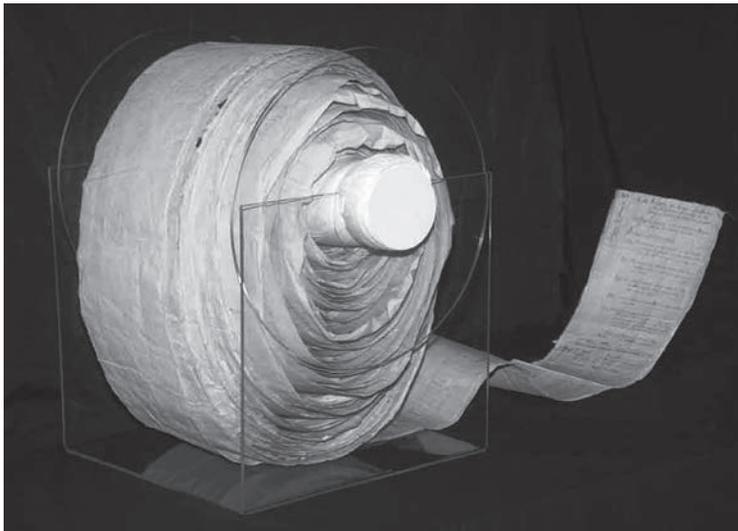


図2 —— 1891年女性参政権のための請願。ヴィクトリア州立公文書館(PROV)所蔵、資料番号VPRS3253/P0、オリジナルは州議会に上程、Unit 851。ヴィクトリア州議会議長の許可を受けて写真掲載。

7 — Luciana Duranti, *Diplomatics: New uses for an old science*, Lanham, MD and London, Society of American Archivists and Association of Canadian Archivists in association with Scarecrow Press, 1998, pp. 65-70.

8 — Paul Ricoeur, Kathleen Blamey and David Pellauer transl., *Memory, history, forgetting*, Chicago, University of Chicago Press, 2004.

9 — Steven Lubar, 'Information culture and the archival record', *American archivist*, vol. 62 no. 1, pp. 10-22.

10 — Jonathan Furner, 'Conceptual analysis: a method for understanding information as evidence, and evidence as information', *Archival science*, vol. 4 no. 3/4, pp. 233-263.

11 — Eric Ketelaar, 'Tacit narratives: The meanings of archives', *Archival science*, vol. 1 no. 2, pp. 131-141.

12 — Andrew Prescott, 'The textuality of the archive', in Louise Craven ed., *What are archives? : Cultural and theoretical perspectives: a reader*, Ashgate, 2008, pp. 31-51.

13 — Philippe Artières, et al., *Le dossier Bertrand: jeux d'histoire*, Manuella Editions, 2008.

署名したヴィクトリア州の女性達より提出いたします請願では、以下のことを謹んでお示いたします」と書かれた文言で始まっています。ここにいる聴衆のみなさんは、だれかの「戸口訪問」キャンペーンによってではなく、人の関わらない手段、つまり、ポスターによって、この講演に招かれました[図3]。このポスターが、招待というパフォーマンスを行ったのです。古文書学では、このような文書^{dispositive document}を行為指示文書と呼びますが、その文書の目的はある行為を実現させることであり、その効果は書かれていること自体によって決まります。つまり、書かれたということそのことが、行為の真髄であり、実体なのです[7]。

日々の生活の中で、私たちは多くのパフォーマンスをする文書に出会います。要請、申請書、召喚、証明書……、それらはすべて、元々はパフォーマンスをする口頭の発話だったものの代替をドキュメントしているのです。

2 — 複数の意味

アーカイブズ文書は自ら語ることはありませんが、もちろん、そこには伝えるべきことがあります。つまり、それは意味を持っているのです[8]。アーキビストも、他の多くの人も、レコードの意味を当たり前ものとして捉えています。レコードは意味を持つために意図的に作られたと考えるからです[9]。しかし、レコードにも他の文化的人工物にも、二重の意味があります。それは客観主義者の言うところのレコードの意味[10]と、誰か或いはある場面にとってのレコードの意味です。レコードは意味の収蔵庫であり[11]、それはレコードから読み取れたり、他のドキュメントにつながるテキスト間の参照から推測されたりすることもあるれば、アーカイブズの作成と利用のコンテキストから類推しなければならぬこともあります[12]。私は意図的に「意味」という語を複数形で使っていますが、それはレコードには意味が一つしかない、ということはないからです。

少し前に、フランスの歴史家フィリップ・アルティエールが、興味深い実験をしています。彼は蚤の市で、あるファイル¹を15ユーロで買いました。それは19-20世紀の文書およそ80点から成るものでした。アルティエールと4人の歴史家は、この「ベルトラン・ファイル」を研究したのですが、その際、そこから何がわかったか、どういうファイルだと結論づけたか、ということ²を互いに知らせずに研究を進めました。予想されたとおり、このファイルからは5種類の歴史解釈が生まれ、それは多くの点で互いに異なっていました。名前、生まれた場所やその年月日、そしてベルトランの子供の数といった、単なる事実に関する事項でさえ、違いがあったのです。5人の研究者による実践の結果は、興味深い認識論の観察を含む、楽しい読み物になりました[13]。文書は、いったん歴史家の目で見えしまうと、その研究者の持つ主題関心のために、客観性を失います。このファイルの意味は、それぞれの研究者



図3 — 講演会ポスター

にとって異なるものでした。いや、むしろ、歴史家それぞれがこのファイルに異なる意味を与えた、と言うべきかもしれません。

歴史家たちは、ファイルの持つ意味を、ファイルそのものや他の情報源から推測せねばなりません。それは単なる情報の検索、つまり認知活動のように見えます。しかし、このことと同じように重要なのは、心理学者が言うところの、意味を構築する際の感情モードと意欲モードです[14]。1970年代に、シカゴ大学の二人の研究者、心理学者のチクセントミハイと社会学者のロックバーク=ハルトンは、アメリカ人が自分の家にあるものについて、なぜ、どのように価値を見いだしているのかを調査しました。彼らの古典的著作『モノの意味』[15]の中で、人は、物——家具、美術品、写真、本、楽器、スクラップブック、家系図、書類、日記——をどのように扱うかということを通じて、自分がどのような人物であるか、あるいはこれまでどうだったか、これからどうなりたいか、ということ定義づける、ということ明らかにしています。ある人が、感情モードにおいて、ある物に注意を向け、それが置かれている環境からそれを選び取ります。言ってみれば、それによって、その物から心的エネルギーが放出されたのです。物に対するそのような注意と感情は、人をフローの状態に導きます。その人はその物を取り扱うことで頭がいっぱいになり、時間の概念を無くし、その物との交流に大きな満足を見いだします。こうしたことは、例えば本を読んだり、アルバムをばらばらとめくったり、日記や古い手紙を読み返している時などに起こります。意味を構築する時の意欲モードは、認知情報検索の結果と感情面の注意、すなわち、意図、目的、利用者が物の持つ意味に反映されていると考える目標、を参照します。チクセントミハイとロックバーク=ハルトンは、例えば古い家族写真を見ることで、家族関係や、世代をつなぐ連続性の確認と強化などが引き出されるだろうと言っています。彼らは、「家の中にある他のいかなる物よりも、写真が、互いの結びつきの記憶を残す役割を果たす。感情を喚起させうる力という点で、写真をしるぐ種類の物はない。写真に匹敵するのは、若い世代が言及したステレオスピーカーだけだろう」[16]ということを発見したのでした。これは1977年のことで、現在の文化的実践についての研究は違った結果をもたらしています。現代世界では、若者にとってはデジタル写真を共有することの意欲面の目標は、双方向の交流と仲間どうしの結びつきですが[17]、彼らが年をとった時、写真にどのような価値を見いだすことになるでしょうか。チクセントミハイとロックバーク=ハルトンが明らかにしたように、写真に見いだす価値について「年齢による劇的な違い」があり、「その人の経験の連続性を伝える物や意味には年齢とともに変化があるようだ」[18]ということを示すことになるのでしょうか。

人々がどのようにレコードと関わっているか、ということを示すのに、私たちは意味構築の心理学を用いることができます。1609年の朱印状を書くということは、認知活動です。が、その朱印状が1641年に日本に送り返されたとき、それは日本人とオランダ人双方の崇拝を得て、感情の対象物になりました。オランダ人はそれを

14 — Ernest R Hilgard, 'The trilogy of mind: cognition, affection, and conation', *Journal of the history of the behavioral sciences*, 16 (2), pp. 107-117.

15 — Mihaly Csikszentmihalyi and Eugene Rochberg-Halton, *The meaning of things: domestic symbols and the self*, Cambridge University Press, 1981. (訳者補注: 以下の邦訳あり。ミハイ・チクセントミハイ、ユージン・ロックバーク=ハルトン著、市川孝一、川浦康至訳『モノの意味: 大切な物の心理学』、誠信書房、2009年。)

16 — 前掲注15。

17 — José van Dijck, *Mediated memories in the digital age*, Stanford, Stanford University Press, 2007, pp. 114-115.

18 — 前掲注15。

宝物として保存し、こんにち、それを遺物として展示しています。ところで、ハーグで私たちが保存している箱が1609年のものなのか1641年のものなのか、私にはわからないのですが、いずれにせよ、それには徳川の家紋がついています。意欲モードにおいて、この朱印状はオランダ人の貿易独占を支え続け、一方でハーグでの展示は日本とオランダの独自の関係を祝うことを支えています。

同様に、大請願を書くのも、認知活動でした。それを巨大請願書^{Monster Petition}に作り上げ、先ほど申し上げたように、レコードを「パフォーマンス」させることは、感情を要することであり、強調したり強い印象を与えたりしつつ、女性の参政権を勝ち取る意欲という目標を持って、なされたのでした。意味構築の認知・感情・意欲という三分論を理解することは、私たちがレコードを生きた状態にし続けるうえで、助けになるのです。

先ほど言いましたように、レコードはさまざまな意味に充ちています。著者がドキュメントに意味を与え、受け取った人はそれを読み、さらにそのレコードを特定のコンテキストで使用したり保存したりする際に、それに意味を割り当てます。巨大請願書は、初め、議会によって「上程する」^{t a b l e}よう命じられました。それは文字通りの意味で、ということではありませんが、そしてその後議論され、議会記録の一環としてしまっておかれました。この巻物は、今はアーカイブズの性質を持つドキュメントとなり、ヴィクトリア州立公文書館の収蔵庫にあります。この請願は、他のレコードとは異なり、通常は閲覧室で提供されることはありませんが、昨年(2008年)、公文書館で展示されました。人々はそのドキュメントが巨大なリールに巻かれているのを見る機会を得たのです。しかしながら、人々はその請願原本の大きさのため、それを効果的に使うことはできません。それは、使用できるレコードというよりも、象徴となりました。いや、むしろ、初めからずっと象徴だったのかもしれない。それは、象徴として、オーストラリアの記憶遺産登録簿に記載されています。署名を付された各ページのデジタル画像は、議会のウェブサイトアクセス可能で、公文書館のwikiページにリンクが貼られています。デジタル画像は、請願の物理的な属性のいくつかを表示しています。それは、紙、インク、請願に署名するのに使われた筆記具(ペンや鉛筆)、といったものです。これらの特徴は、原本にアクセスできる(当然です)修復専門家によって研究され、その成果は、公文書館が刊行している雑誌『プロアクティブ』で明らかにされました[19]。修復専門家にとっては、そのドキュメントは、また別の種類の疑問に解答を与えてくれたのでした。

大請願の持つ意味は多様です。それは、そのドキュメントが、様々な認知・感情・意欲のモードでアクセスされるからです。ドキュメントがどのように提示されるか、何を表しているかというあり方によって、利用者はこれらのモードを引き出す際に制約を受けます。レコードについて何らかの決定をする際には、保管者は、どの利用者にとっても意味構築の三分論があり得るようにしなければなりません。

アンゲリカ・メンネ=ハリッツがまとめたアクセスのパラダイムにおいては、アーカ

イブズからどのような意味を構築するかを決めるのは、利用者の自主的な責任です[20]。テオ・トマセンは、「解釈の自由は、アーカイブズ利用者の基本的権利だ」と書いています[21]。オランダのアーカイブズ・イヤーブック『アクセス』^{Toegang}[22]での草分けのエッセーの中で、彼は、アーカイブズの方針と管理にとって、その権利が、なぜ、どのように、試金石となるのかを説いています。しかし解釈の自由は、アーカイブズがどのように提示され何を表しているかということに関わりなく、意味構築の認知・感情・意欲のモードを必要とするものです。

3 — 活性化

大請願の、その巻を解くこと、新たにパースペクス製の軸に巻き直すこと、オリジナル資料の属性を研究すること、デジタル化すること、ウェブ上でデータベースを開発・活用すること、wikiページを通じて請願のコンテンツを広めていくこと。そのどれもが、レコードの活性化であり、流用です[23]。それぞれの活性化が、私がレコードやアーカイブの意味上の糸図と呼ぶものに枝を足します。アーカイブは、永遠に凍結して過去の中の時間の中でのみ解釈可能な過去の化石ではありません。私たちが過去を見る見方は現在に規定されているのであり、「過去は現在の感情と調和し、関連づける」[24]のです。もっと言えば、アーカイブは未来指向です。ちょうど私たちの記憶がそうであるように。「過去に何が起こったかということは、私たちに何が起ころうとしているのかの予測を可能にする限りにおいて、重要である」と、ダウエ・ドライスマが書いています[25]。そして、記憶は過去ではなく、これから何が起こるのかということに焦点をあてており、それ故に私たちの回想は将来を向いているのだ、と書き添えています。ヤヌス神の二つの顔は過去と未来の両方を向いており、アーカイブズの象徴ですが、アーカイブは生きているアーカイブであり続け、決して閉じることがない、ということの意味しています。ジャック・デリダが言うように、それは将来の予測なのです。

私がこのことを、2、3年前に「暗黙のナラティブ：アーカイブズの持つ意味」[26]という論文で提案した時、それが私がアーカイブズに対してポスト・モダンの立場をとることに忠誠を誓う合図となりました。少し前に、ジョン・ライドナーは『干拓地からポスト・モダニズムへ：アーカイブズ理論概史』[27]という小さな本を出しました。干拓地とは、ムラー、フェイト、フラウンのことを指します。ライドナーは、この『ダッチ・マニュアル』^{訳注2}の著者3人を、レコードの組織者と呼んでいます。そのあとに続くのはレコードの保管者であるジェンキンソンで、3番目に来るのが、シェレンバークに触発されたレコードの選別者です。ライドナーは、4人のカナダ人アーキビストと私のことを、「アーカイブズ探求」パラダイムにおけるポストモダニストと呼んでいます。

20 — Angelika Menne-Haritz, 'Access: the reformulation of an archival paradigm', *Archival science*, vol. 1 no. 1, pp. 57-82.

21 — Theo Thomassen 'De veelvormigheid van de archiefontsluiting en de illusie van de toegankelijkheid', in: Theo Thomassen, Bert Looper, Jaap Kloosterman eds., *Toegang: ontwikkelingen in de ontsluiting van archieven*, Jaarboek 2001, 's - Gravenhage, Stichting Archiefpublicaties.

22 — 前掲注 21。

23 — 前掲注 11、および以下の論考。Tom Nasmith, 'Reopening archives: bringing new contextualities into archival theory and practice', *Archivaria*, vol. 60, pp. 259-274.

24 — Barbara A. Misztal, *Theories of social remembering*, Maidenhead and Philadelphia, Open University Press, 2003, p. 114.

25 — Douwe Draaisma, Arnold and Erica Pomerans transl., *Why life speeds up as you get older: how memory shapes our past*, Cambridge University Press, 2006, p. 57.

26 — 前掲注 11, pp. 131-141.

27 — John Ridener, *From polders to postmodernism: a concise history of archival theory*, Duluth, Litwin Books, 2009.

訳注 2 — 『ダッチ・マニュアル』とは、以下の書籍の通称。Samuel Muller, Johan A Feith, en Robert Fruin, *Handleiding voor het ordenen en beschrijven van archieven*, Groningen, Erven B. van der Kamp, 1898. 英訳版は以下の通り。Arthur H. Leavitt, transl., *Manual for the arrangement and description of archives*, Chicago, Society of American Archivists, c2003.

28 — 前掲注 27, p.117。

29 — 前掲注 21, p.42。

30 — Urs Fuhrer, *Cultivating minds: identity as meaning making practice*, Routledge, 2004.

31 — http://yourarchives.nationalarchives.gov.uk/index.php?title=Home_page

ライドナーによれば、「探求」パラダイムで活動するアーキビストは、アーカイブズ理論をコミュニケーション理論として見ているといいます。「アーカイブズ文書から利用者へ、資料群からアーキビストへ、レコード作成者から現用文書へ、といった情報の伝達は、すべて、アーカイブズに関わるコンテキストで発生するコミュニケーションの領域の一例である。それぞれのコミュニケーションのステップには、情報の伝達と受領の間に解釈が生まれる可能性がある」[28]。コミュニケーションと解釈を通じて、絶えざる新しいコンテキストが発生する中で、レコードとアーカイブズは不安定なものになります——それは不明瞭でもあり、問題を孕むものでもありますが。いずれにせよ、実証主義の概念としての客観性、中立性、真実からはかけ離れたものです。まず初めに解釈について取り上げ、続いてコミュニケーションについて触れましょう。

4 — 解釈

テオ・トマセンは、アーカイブズ利用者の多くは、何かを見つけるためだけでなく、単に検索をするためにアーカイブズを利用するのだ、何かを見つけるためだけでなく、検索して見つけるという体験や、そうして見つけたものから作り得る物語のために、アーカイブズを利用するのだ、と論じています[29]。利用者たちは、自分たちが何者であって何者でないか、自分たちの居るべき場所やおさまりの悪い場所はどこか、誰が自分たちにつながる者で誰がそうでないか、といったことを形づくる物語を生み出します。実際、利用者はアーカイブやレコードに意味を見いだしたり意味を創出したりし、そしてそれらの意味は自らと世界との関係性を構築・再構築し、それによって自らのアイデンティティを形づくることを助けるのです。

ウルス・フーラーの著書のタイトル、『意識のカルティベーション：意味創出の実践としてのアイデンティティ』[30]が示すように、アイデンティティの形成とは意味の創出です。フーラーは、アイデンティティ形成を、4つの共同構築システムにおいて発生するプロセスと捉えています。4つのシステムとは、主体、客体、社会的パートナー、そして4番目には、世界、です。客体あるいは人工物は文化的コンテキストを媒介し、社会的パートナーはアイデンティティ形成のための社会的コンテキストの媒介者となります。客体は、アーカイブズ文書でもあり得るし、社会的パートナーは家族や同僚や仲間でもあり得ます。写真アルバムを作ることを想像してみてください。アルバムは物質として存在するものでもよいし、flickr上のバーチャルなものでもかまいません。あるいは、あなたの個人アーカイブズを整理したり、ブログを書き綴ったり、wikiやYouTubeや、イギリス国立公文書館がウェブ2.0へ対応すべく構築した「あなたのアーカイブズ」[31]のようなインターネット上のコミュニティへ投稿したりすることを想像してみてください。これらすべての場合において、情報

客体の持つ意味は、個人的経験の枠組みと、ブログ著者やwiki投稿者を取り巻く社会的パートナーとの媒介の中に、共同で作られています[図4]。そしてそのコミュニティは、アーカイブ作成者とアーカイブ利用者が、その一部を構成しています。「あなたのアーカイブを見せてください。そうすれば、私にはあなたがどういって、どの社会的コンテキストの中で機能しているのかがわかります」という具合に言えるかもしれません。媒介には、意味の定義、選別、組織化、解釈、提示を含みます。そしてそれは反復するプロセスであり、イギリス国立公文書館のルーズ・クレイヴンは、「意味構築としてのアイデンティティは、アーカイブズ文書の経験を通じて、永続的に構築・再構築される」と記しています[32]。

この視点では、アーカイブズは静止したものでも死んだものでもありません。チクセントミハイとロックバーク＝ハルトンが書いているように、「物は静的な存在ではない。物の持つ意味は、脳の認知機能や文化の抽象的概念システムから投影されたものである」[33]のです。客体は、主体にとっての意味がどのように発生するかということを経介し、その媒介を通じて、主体と客体は互いを構成しあうのです。

例えば、あなたの携帯電話が鳴り、写真や動画が現れたとします。電話と聴いている人は共にビューアとして構成されており、それらを取り巻く世界の意味を構成しています。これは「ものごとが何をするか」についての、ものごとの力の例です。『ものごとが何をするか』というのは、私たちの行動や世界についての認識をいかに技術が媒介するか、ということ論じたピーテル＝パウル・フェルベックの著作のタイトルです[34]。それは、ブルーノ・ラトゥールのアクター・ネットワーク理論の基本的な概念でもあります。ラトゥールは、フランスの最高行政裁判所である国務院のエ

32 — Louise Craven, 'From the archivist's cardigan to the very dead sheep: what are archives? what are archivists? what do they do?', in Louise Craven ed., *What are archives? : cultural and theoretical perspectives: a reader*, Ashgate, 2008.

33 — 前掲注15, p.173.

34 — Peter-Paul Verbeek, *What things do: philosophical reflections on technology, agency, and design*, Pennsylvania State Univ Press, 2005.

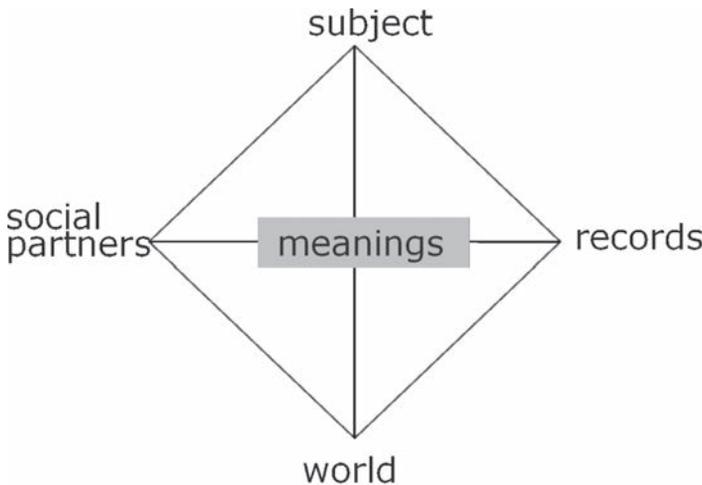


図4 — 客体(object)をレコードとした場合の概念図

35 — Bruno Latour, *The making of law: an ethnography of the Conseil d'Etat*, Polity, 2010.

36 — Wanda Orlikowski, 'The duality of technology: rethinking the concept of technology in organizations,' *Organization science*, vol. 3 no. 3, pp. 398-427.

37 — Jacques Derrida, *Archive fever: a Freudian impression*, University of Chicago Press, 1996, p. 17. (訳者補注: 以下の邦訳あり。ジャック・デリダ著、福本修訳『アーカイヴの病: フロイトの印象』、法政大学出版局、2010年。)

38 — François Cooren, 'Textual agency: how texts do things in organizational settings', in *Organization*, 11, pp. 373-393.

スノグラフィーについての著作の中で、国務院は法によって構成されているのではなく、壁、廊下、ファイル、裁判官、テキスト、キャリア、出版物、議論から構成されているのだと書いています[35]。国務院のすべての活動を組織化するトリガーは、一件文書ファイルであり、それ自体が国務院、原告、被告、そして第三者によって作られたものです。

物と人の相互構成関係は、ワンダ・オルリコフスキの技術の二重性の議論にも出てきます[36]。技術は、特定の社会的コンテキストにおいて人々が使うためにデザインされますが、同時に人々が行う実践や彼らが技術に付与する意味を通じて社会的に構築されています。最終的には、技術は制度化され、組織の構成要素のひとつとなります。

技術は組織を構成するだけではありません。技術はアーカイブの形、さらにコンテンツも形作ります。ジャック・デリダの言葉を借りれば、「アーカイブをアーカイビングする技術的構造が、アーカイビング可能なコンテンツの構造も決定する。そのコンテンツが生まれたばかりの時も、将来との関係性においても。」[37]どのように私がものを書くかということ——ペンで書くか、手のひらに書くか、PCで書くか——は、私が書くものに違いを生じさせます。そして技術だけではなく、私がものを書く社会的コンテキストも、私が書くことに違いを生じさせます。私はこれを、「^{archivalization}アーキバリゼーション」と名付けました。それは、あるものがアーカイビングに値するかどうかを考える、意識的又は無意識的な(社会的文化的要因によって決せられる)選択のことです。

5 — コミュニケーション

私は先ほどジョン・ライドナーに言及し、彼が、「探求」のパラダイムにおいては、アーカイブズ学は何よりもコミュニケーションと解釈の理論である、と言ったと述べました。事実、現在のアーカイブズ学では、アーカイブズ文書を単なる情報対象としてではなく、コミュニケーション・プロセスの構成要素として扱います。レコードは証拠であるだけでなく、自らコミュニケーションをし、そのコミュニケーションを通じてパフォーマンスを持ち、何かを成し遂げ、その前後で状態を変化させます。コミュニケーション学と組織社会学の研究者であるフランソワ・クーランは、「レポート、契約書、メモ、サイン、仕事の指示、といったテキストは、何らかのパフォーマンスをする」という言い方をしています[38]。それらにはある働きがあるのですが、それは言い換えれば、それらは「状態の変換」を引き起こすということです。あなたは、しょっちゅう、ToDoリストやコンピュータのディスプレイに貼った黄色いポストイットなどの非・人的アクターの助けを借りながら、頑張って物事を忘れないようにしていませんか? クーランは、「もしメモが何もやっていないとしたら、それは状態に違い

を生じさせることはないだろうが、それでもなお、それが存在することだけでも、管理者の行動のトリガーとなるには十分である。メモがしていること(思い出させること)は、それを書いた人間がしていることなのである」と書いています[39]。

このテキストの働きというのは、物事のもつ力のもうひとつの事例です。アーカイブズ文書は力、すなわちブライエン・ブロスマンが最近書いたように、「私たちの生活に変化をもたらし得る、ある種のコミュニケーション力」を持っているのです[40]。

6 —— カルティベーション

変化という効果を与えることとは、言い換えれば、カルティベーションです。文字通り捉えれば、カルティベーションとは土地を耕すこと、作物を育てることです。ここでは改善、発展、改良、世話が求められます。ドキュメントや他の人工物は、カルティベーションを通して意味を得ます。ウルス・フーラーが書いているように、「意味はただ単に固定されているのではない。むしろカルティベーションのプロセスの中に、あるいはそれを通じて存在しているのである。そのプロセスには、人工物の創出や、世話、問い、あるいは苦痛によって生じる生活習慣も含まれる」[41]のです。先に触れたように、家具、芸術品、写真、本、楽器、スクラップブックなどは心的エネルギーを放出させますが、それと同じように、カルティベーションも心的エネルギーを放出させます。自分と客体との間のそのやりとりにおいて、意味が創り出され、構築されます。ロックバーク=ハルトンは「生きているサインとして、客体はその重要性を維持するためにカルティベートされなければならない。カルティベートされた客体であれば、時の経過とともに、物はその重要性を増し、新たな意味の層を獲得する」と書いています[42]。レコードはカルティベートされなければなりません。つまり、認知的に理解され、感情的に価値を認められ、意欲的に意味が注がれなければならない、ということです。

カルティベーションは、アーカイブズや他の文化的財を生きた状態にするだけではありません。今日では、カルティベーションは、デジタルドキュメントのパフォーマンス機能に、その大半が組み込まれています。ウェブサイトで注文フォームを入力したり、税金還付書類を送信したり、申請書を提出したりするとき、ウェブ上のドキュメントは沢山のプロセスを始動させ、別のドキュメントを作り出します。デュランティやティボドーは「実現機能」レコードと呼んでいますが、そうした他の事例としては、楽器がコンピュータとインタラクトできるようにするソフトウェア・パッチや、あるサイトでの利用者の行動についてのデータを解釈する、サイトに置かれているソフトウェア(アマゾン社のサイトでの「こんにちは、エリック・ケテラルさん。おすすめ商品があります」という表示など)があります[43]。メディア研究学部の私の同僚たちは、エルゴード的メディアオブジェクトという用語を使います。これは、そのオブジェクトを

39 —— 前掲注38, p. 378。

40 —— Brien Brothman, [book review of] P Henttonen, *Records, rules and speech acts*, Tampere University Press, Tampere, 2007, in *Archival science*, vol. 8 no. 2, p. 154.

41 —— 前掲注30, p.90。

42 —— Eugene Rochberg-Halton, *Meaning and modernity: social theory in the pragmatic attitude*, University of Chicago Press, Chicago, 1986, p. 170.

43 —— Luciana Duranti and Kenneth Thibodeau, 'The concept of record in interactive, experiential and dynamic environments: the view of InterPARES', *Archival science*, vol. 6 no. 1, pp. 13-68.

44 — Jan Simons, *Interface en cyberspace: inleiding in de nieuwe media*, Amsterdam, Amsterdam University Press, 2002, p. 192, 206; Joost Bolten, *Tussen voorstelling en tekst: de plaats van de tekst in het videowerk van Gary Hill*, Amsterdam, 2006, pp. 315-322.

45 — Lawrence Lessig, *Remix: making art and commerce thrive in the hybrid economy*, London, Penguin Press HC, 2008.

46 — <http://jp.jcastle.info/castle>

47 — <http://www.scenic-okhotsk.com/map.html>

48 — <http://www.undata-api.org/>

生成するためには、利用者の意図的で、働きかけを伴い、意味のある行動が必要なメディアオブジェクトのことです。例えば、インタラクティブなインスタレーション芸術では、芸術作品は、いわば、パフォーマンスを実行するために利用者を待っているのだと言えます[44]。オーストラリア国立公文書館のデジタル・レコードの保存についての録書は、次のように記しています。「このように、デジタル・レコードは物理的なオブジェクトではなく、その代わりに、技術とデータの媒介の結果となる。オブジェクトは、技術とデータが相互作用し続ける間のみ存在する。その結果、レコードは、一回ごとのレコード・ビューが、それ自身が新しい「オリジナル」となる。二人の人が同時にそれぞれのコンピュータ上で同じレコードを見ることができ、ともにレコードの等しい「パフォーマンス」を経験することになる。」

利用者は情報の読者かつ著者、消費者かつ生産者になります。この後者を、ローレンス・レッシグの言うRW文化、つまり読み/書き文化では生産消費者と名付けています[45]。人は、様々なアプリケーションの音声認識機能と読み上げ機能によって、読者かつ聴者になります。その人は自分のドキュメントを作成し、読み、聴き、見るだけでなく、他の人々のドキュメントに寄稿し^{リミックス}改変します。

7—アーカイブ2.0

いわゆるウェブ2.0では、「利用者が創出したコンテンツ」の作成にあたって、テキストの働きが重要な役割を果たします。ウェブ2.0とは、情報の提供者と利用者との間の差異が減少したり、あるいはなくなりさえするようなウェブ上の様々な特徴や現象全体を指す用語です。政府や民間で作られたドキュメント、ウェブサイト、データベースの境界は、その組織の外部にいる共同作成者との間の接点となりつつあります。アプリケーション・プログラミング・インターフェース(API)を使って、あなたはマッシュアップ、つまり、他者のデータや技術を利用したウェブサイトを作ることができます。例えば「JCastle: guide to Japanese castles」[46]や、4人のブロガーが地図上の様々な地点に書き込みをしている「東オホーツクシーニックバイウェイ」[47]があります。UNData API[48]を使えば、国連のデータベースのデータを自分のウェブサイトで使うことができ、さらにデータを加工したり、より充実させたりすることができます。

BBC(英国放送協会)は早い段階でその可能性を把握し、「backstage.bbc.co.uk : BBCのコンテンツを使って何でも好きなものをつくろう」というサイトを立ち上げました。この「バックステージ」モデルは、イギリスで政府のアーカイブズのために宣伝されています。市民に、公的機関の情報を利用し、その情報をより豊かにし、その情報に新たな利用法や意味を与える、言い換えればカルティベートするように、刺激するのです。この発展を推進しているのが、国立公文書館を通じて活

動している公共情報局だというのは、意義深いことです。同局は「公的機関情報解放サービス」を提供しており、公的機関の情報を、その情報の「第二の人生」で、新たな利用のため、新たなコンテキストで、そして新たな意味を持って改変することを可能にしています[49]。オランダ国立公文書館では、収蔵写真コレクションの中から、800枚をflickrに載せました[50]。これらの写真には、最初の6ヶ月で100万ページビューにのぼるアクセスがあり、6850件のタグが追加され、1900件のコメントが書き込まれました。コメントのうちの3%は、国立公文書館による記述を修正するのに使われました。例えば、「サムライ」という語の表記に英語でのスペリングも付け足すべきだ、という提案が、どのように国立公文書館によって受け入れられたかを見ることができます[51]。表現が不適切だということで削除しなければならなかったコメントは、たったの3件でした。

様々な出所のドキュメントの力は、将来、ますます重要になるでしょう。というのも、ウェブ3.0は、ウェブサイトのコンテンツを理解してドキュメントを結びつけるからです。ですが、まずはウェブ2.0を使いこなすことから始めましょう。アーカイブズ機関ではウェブ2.0の潜在的可能性を徐々に見いだしつつあります。それはいずれ自らを参加型アーカイブズに組み替えていくことにつながるでしょう。イスト・フヴィラが最近提案したように、そのようなアーカイブは参加型情報探索(あるいは意味構築)に焦点を当てます。つまり、アーカイブへの参加が、レコードについての会話に限られるものではなく、むしろその代わりにレコードを「参加のための会話や場として」使うということです[52]。

このような参加型アーカイブは、文化遺産の需要と供給という枠におさまられるべきではありません。「人々のアーカイブズにおいてデジタルであること」[53]は、レコード・コンティニウムすべての次元、すなわち、作成、捕捉、組織化、および多元化、から成っています。これらのどの次元においても、社会の網目は圧倒的に人々のネットワークであって、ドキュメントのネットワークではありません。しかしそれでもなお、公務員2.0やビジネスで同様の立場にいる人たちは、真正で信頼できるレコードを作成し、保管するということから逃れることはできません。ウェブ2.0やウェブ3.0の環境下で、レコードの作成とレコードキーピングのためのツールをデザインし実装するために、パフォーマンスティヴィティ、すなわちレコードの力を最大限に活用することは、アーカイブズ学の研究者と実務家にとって大きな挑戦です。

5年前、学習院大学で行われた日本アーカイブズ学会設立大会での私の講演で、私は社会的文化的アーカイブズ学の立場を弁護しました[54]。今日の講演では、アーカイブズの作成、レコード・マネジメント、そしてアーカイブズの利用における意味構築の心理学について注意を喚起することで、その時の講演を補足したいと考えました。ここでは、ドキュメントの力が中心的な役割を演じます。それはレコードのパフォーマンスティヴィティの故です。そのようにすることで、私はカナダのアーキビスト仲間のトム・ネスミスTom Nesmithのアーカイブズ理論の新たな方向性

49 — <http://www.opsi.gov.uk/unlocking-service/OPSIpage.aspx?page=UnlockIndex>

50 — <http://www.slideshare.net/cvanderventaking-pictures-to-the-public>

51 — <http://www.flickr.com/photos/nationaalarchief/3774080165/>

52 — Isto Huvila, 'Participatory archive: towards decentralised curation, radical user orientation, and broader contextualisation of records management', *Archival science*, vol. 8 no. 1, p. 27.

53 — Eric Ketelaar, 'Being digital in people's archives', *Archives and manuscripts*, 31, p. 8-22.

54 — エリック・ケテラール著、見玉優子訳「未来の時は過去の時のなかに: 21世紀のアーカイブズ学(Time future contained in the past: archival science in the 21st century)」、『アーカイブズ学研究』, no.1, 4-35頁。記録管理学会・日本アーカイブズ学会共編『入門アーカイブズの世界: 記憶と記録を未来に』(日外アソシエーツ, 2006年, 25-46頁)に再録。

55 — Tom Nesmith, 'Still fuzzy, but more accurate: some thoughts on the "ghosts" of archival theory', *Archivaria*, 47, p.142.

を求める呼びかけ[55]に応えようしました。新しい理論の方向性とは、古典的な学説に基づき、何がアーカイブやレコードの「本質」を構成するのかというところへ焦点をあてたものから、「人の認識、コミュニケーション、振る舞いは、いかにしてアーカイブズを形作るか」ということの研究へと方向性が変わることです。ネスミスは更に続けて言います、「それが、アーカイブズとは、レコードとは、そして公文書とは、あるいはその他諸々のアーカイブズの特徴とは、いかなるものであったのか、そしていかなるものであるのか、ということの理解に私たちをより近づけてくれるだろう。とはいえ、それでもまだその「本質」を完全には確立できないだろうが。……より広い世界に窓を開くことで、アーカイブズについての議論の世界に入っていく時に、より多くの仮説、情報、見通しが得られるであろうし、既存の見方に挑むことになるだろう。」と。